

ヨーロッパ哲学者の誕生 —— 哲学の世界地図¹の由縁について

エルマー・ホーレンシュタイン (チューリヒ工科大学元教授)

訳：田中 均

誰が、何を、いつ、どこで語ったかということとはそれ自体としては哲学者の関心事ではない。哲学者が関心を持つのはむしろ、誰かがいつかどこかで言ったことが正しいか間違っているかということである。しかし、ある言明が正しいか間違っているか判断するためには、まずそれを理解しなければならない。ある言明を理解するためには、それを誰がいつどこでいかなる文脈で行ったのかということが非常に示唆に富む。われわれが哲学の歴史と並んで哲学の地理に興味を持つことの、これが第一の解釈学的な理由である。理解についての学問である解釈学の最高の原則によれば、あるテキストの解釈にとって、そのコンテキスト——言語的・社会的文脈——の理解は決定的に重要である。

他の人が他の時代に他の土地で考えて書いたことのほうが、われわれが自分の時代に自分の土地で考えて書くことよりも独創的で重要である、ということがしばしばある。これが、自分の時代と国を越えて、考えられ書かれることなら何でもを知ることの二つ目の根拠である。

哲学の本来の仕事は、可能な限り多くの、そして可能な限り新しく異質な認識を収集す

ることではない。そうではなく、認識を保護し維持することであり、より伝統的・理性主義的に言えば、認識の基礎づけと正当化である。このためには間主観性と間文化性が必要である。認識が保護されるとは、私だけでなく、相応の能力を持つ全ての他者がその認識を確信するということである。ある認識が文化的に制約されていると考えるならば、それを間文化的に検証することがふさわしい。これが、哲学の地理学に取り組むことの三つ目の、認識論的な根拠である。

さて哲学史の本に地図が現れることは少ない。その少ない地図はしばしばある種の天気図に似ている。それは半世紀前、私の若いころに、新聞やテレビに見られたものである(図1、スイスの天気図)。天気図はある国の国境を越えることはなく、その内部の天気だけを示す、まさに今日この天気がどうなるかを知りたい人にはこれで十分である。しかし、数日後に天気がどうなるかを知りたい人には、日照や風や雨がそうであるように、ある国の国境で終わるのではないような地図を持つ方がよい。幸いわれわれは最近では気象衛星からの画像を受信しており、そこにはわれわれの国が広い領域の中に置かれている

注

1 Philosophie-Atlas: Orte und Wege des Denkens, Zürich: Ammann, 12004, 32004.以下の議論の一部と地図W1、O1およびO5はこの世界地図から採ったものである。

(図2、ヨーロッパの衛星写真)。衛星写真は国境には従わない。われわれのところの天気がおそらく変化するであろうこと、そしてとりわけ、なぜ天気に変化するのかを教えてください。ある国を覆う天気は、その国の内部の要因には部分的にしか依存していない。日本の天気に関してはおおよそ、アジア大陸とその外の太平洋での気象学的なプロセスが決定的である。台風は太平洋で形成される。

伝統的なタイプの地図の極端な例は、「ヨーロッパ中世の大学と重要な学校の地図」(図3)²で、これを作ったのは私のスイス人の同僚で、中世西ヨーロッパの哲学の二人の優れた専門家である。ヨーロッパの一般的な地図では、基本的に北アフリカが大きく帯状に描かれる。これは純粋に地図製作上の理由によるものである。大陸の境界は、緯度や経度に沿って走っているわけではない。マルタ島やクレタ島をヨーロッパ地図に描こうとするならば、不可避免的に、北西アフリカの大部分が地図に入ってくる。

二人の哲学者による地図は北アフリカの海岸線を部分的に示すことで満足している。チュニスも、ビジャヤ(Bijaya/Béjaïa)も、カイラワン(Qayrawan/Kairouan)も書き込まれていない。チュニスにはドミニコ会修道士がアラビア語研究のための学校を創設した。マヨルカ出身の万能の学者ラモン・ルル(ライモンドゥス・ルルス)、彼はライブニッツの先駆者だが、13世紀と14世紀に二度チュニスに旅して、彼の地あるいは帰還の途中で没した。百年前には、アルキメデス以来の最初のヨーロッパの重要な数学者であるフィボナッチが、今日のアルジェリアのカビ

注

2 Peter Schulthess & Ruedi Imbach, Die Philosophie im lateinischen Mittelalter, Zürich: Artemis, 1996 : 331.

3 私は、民族や土地が自らを呼ぶ名称を、他者が与えた名称よりも優先する。ローマ人がヘラスをグラエキア(「ギリシア」と呼んだのである)。

リ地方の町ビジャヤで学んだおかげで革命的な認識を獲得した。ヨーロッパ最古の医学部である南イタリアのサレルノと南フランスのモンペリエでは、カイラワンのイザーク・イスラエリのテキストが読まれていた。「ヨーロッパ的学問と哲学」と呼ばれるものは、ムスリムの学者がヨーロッパ中世の大学に与えた影響抜きには考えることができない(図4、地図W1)。

しかしわれわれはヨーロッパ哲学史を中世からではなく、古代における始原から始める。なぜ哲学史が南東ヨーロッパのヘラス(別名ギリシア³)から始まり、北西ヨーロッパのどこか、フランス、イングランド、あるいはドイツではなかったのか、という問いへの答えは簡単である。ヨーロッパ哲学史は、都市文化、文字文化、学問文化がその当時最も進んでいたエジプトとバビロニアに最も近い部分で生まれたのである。ヘラス的(別名ギリシア的)哲学と学問の最初の中心はそもそもヨーロッパではなく、アナトリア、つまり今日のトルコのみレトにあった。第二の中心はヨーロッパのアテネにあったが、第三の大中心はすでにまたヨーロッパの外、アレクサンドリアであった(図4)。

アラブ人によるアレクサンドリアの征服後の哲学と学問の最初の大中心は、バグダードであり、ヨーロッパのはるか外であった。イスラム教のスペインへの普及のおかげで、もうイスラム教徒の町になっていたコルドバ(Qurtuba/Córdoba)がそれに続いて第二の中心だった。その次によく、重要な中心が北ヨーロッパに見出される。まずパリ、次にパリ、オランダ、イングランド(オックス

フォードとケンブリッジ)の三角形、そしてケーニヒスブルクと最後に19世紀にベルリンであり、20世紀の後半に中心ははっきりとアメリカ合衆国に移った(図4)。

(補足:→慣習的な境界の内側のヨーロッパの地図)

しかしわれわれは、今日ヨーロッパ文化と呼ばれるものの始まりに戻ろう。ヨーロッパ文化の最も単純な定義とは以下の通りである。

ヨーロッパ文化とは、ヘラスと聖書(すなわち「オリエント」⁴⁾)の、つまり、南西アジアと北東アフリカの、世界観と価値観との結合である。

この結合がどこで成立したかという問いには、それはヨーロッパではなく、南西アジアと北アフリカであると答えられる。古代におけるこの結合の決定的な出発点は、アレクサンドリア出身のフィロンとオリゲネスと、かつてのカルタゴ周辺出身のアウグスティヌスという、ユダヤ教と初期キリスト教の神学者に由来する。そのための基盤は同じくすでに折衷的であったヘレニズム(つまり後期古代のヘラス的-「オリエント的」な混合文化であり、われわれはそれを有名なガンダーラの仏像にも見て取ることができる)である。その中心はエジプトのアレクサンドリアとシリアのいくつかの都市であった(図4)。

聖書的思想とヘラス的思想の結合の第二期である中世にとっては、ふたたびユダヤの学者(カイラワンのイザーク・イスラエリ、カイロ(al-Qahira/Cairo)のモーゼス・マイモニデス)と並んでイスラムの哲学者が指導的

な役割を果たした。そのうち二人、アル・ファラビ(おそらくはトルコ系)と、イブン・シーナ(アヴィケンナ)(おそらくタジク系)は、中央アジアのトランソクシアナ地域出身である(アル・ファラビは今日のカザフスタン出身であり、イブン・シーナは今日のウズベキスタンのブカラ出身である)。そして第三の重要な哲学者であるアル・ガザーリは北東イランのトゥス出身である。カルトゥバ/コルドバ出身のイブン・ルシュド(アヴェロエス)は繰り返しモロッコのマラケシュ(Marrakush/Marrakech)に滞在し、またそこで没した。

ヨーロッパの哲学史の最初の2000年、つまり紀元前500年から紀元後1500年までのためには、南は北アフリカ全体、東はイランと中央アジアを含むような地図が必要である。近世になってようやく哲学はしだいに「ヨーロッパ的」になり、その重要な場所は全てヨーロッパの中にある。19世紀と20世紀初頭には、最も重要な展開については北西ヨーロッパの地図で足りる。

1993年5月、私が「旧世界の西部の哲学」というタイトルの拡張されたヨーロッパ地図をチューリヒのスイス連邦工科大学の講義のために作ったすぐあとに、『サイエンティフィック・アメリカン』誌に中世のマッパ・ムンディ(「世界地図」)が掲載されているのを見つけた。私は衝撃を受けた。その地図が切り取った世界は、ちょうど私の拡張されたヨーロッパ地図(図4)と重なっていたが、私の地図の範囲についてはいくらか想像も混じっていたからである。「世界地図」の

注

4 私は、それぞれの地域自身が中心となっているような地理的關係を、ヨーロッパ中心主義的な名前よりも優先する。「オリエント」や「東洋」や「近東」のかわりに、私は「南西アジア」と呼ぶし、今日では明らかに「極東」ではなく「東アジア」と呼ばれる。アメリカから見れば、「極東」と言うことは奇妙なことである。日本から見て、南西アジアを「オリエント」や「近東」と呼ぶことも同じく奇妙なことである。

南はエチオピアに達し、東には、私の地図と同様に、「インド」（南アジア）の細長い帯が見えるが、「中央の国」、つまり中国（Zhongguo/China）はかすかにも見えない。

ヨーロッパを文化的に定義しようと試みる際に、近世以降の学問と産業の革命も考慮するならば、拡張されたヨーロッパ地図もまた十分ではない。そのためには全世界地図が必要となる。

この近世の革命はバビロニアとヘラスの天文学と、南アジア（「インド」）の数学のさらなる発展なしには説明不可能であり、紙から羅針盤と火薬に至る中国の技術的発明も欠かせない。そのどちらも、イラン人とアラブ人というムスリムの学者たちによってヨーロッパに伝えられた。中国での発明の伝来はパックス・モンゴリカ（「モンゴルの平和」）、つまりモンゴルによって支配されたアジアの地域における比較的安定した政治的・経済的状况によって容易になった。モンゴル人の国々は13・14世紀に中国からイラン、ロシア、クリミアまで、つまりコンスタンティノーブルの門前まで広がっていた。マルコ・ポーロはこのパックス・モンゴリカのおかげで大きな危険もなく陸路でパレスチナ（アッコ）から中国まで（1271-75）旅行できた。中国（福建省泉州）からイタリアまでの帰路（1291-95）では、彼はペルシャ湾のホルムズまでペルシャの船で渡ったのである！

いわゆる「ヨーロッパ文化」をヘラスと聖書（「オリент」）の世界観と価値観の結合とみなすという私の定義は、以下のテーゼ

を付け加えることで補足する必要がある。

（a）中世と初期近世のヨーロッパの数学はヘラス（「ギリシア」）と南アジア（「インド」）の成果の結合である。同じことが19世紀と20世紀の「近代言語学」にもあてはまり、これは歴史的にもっと容易に証明できる。（パーニニのサンスクリット文法は、19世紀ドイツの「青年文法学派」から1930年頃のアメリカの構造言語学者レナード・ブルームフィールドに至るまで、ヨーロッパとアメリカの言語学者にとって一つのモデルであった。コンピューター言語学者でさえ、パーニニの分析と高度に抽象的な公式に関心を持っている。）

（b）中世と初期近世のヨーロッパのテクノロジーは、ヨーロッパと中国の発明の結合である⁵。

（c）ヨーロッパで「近代芸術」とみなされているものは、世界のその他の部分からの影響の混合物である。

（d）ヨーロッパの啓蒙時代には、まず中国、ペルシャ、イスラムのモデル、後には無文字文化のモデルが、「近代的」理念（自律的・自然的道徳、宗教的・間文化的寛容、文明批判）への刺激の源泉であり、ヨーロッパ内部の後進性と反動的な敵意に対抗する道徳的な支えの一つであった。これはフランスの知識人モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、およびドイツの学校哲学者クリスチャン・ヴォルフにあてはまる。

これら全ては今日の「グローバル化」について以下のような意味を持つ。

注

5 Joseph Needham, Introduction to Robert K. G. Temple, China: Land of Discovery, Wellingborough: Stephens, 1986 : 7 : 「フランシス・ベーコンは三つの発明、つまり紙と印刷、火薬、羅針盤を選び、近代世界を全面的に変革して古代や中世と区別する上で、それらの発明はいかなる宗教的信念や占星術の影響、あるいは征服者の成果よりも多くのことを成し遂げたと考えた。彼はこれらの発明の起源は『闇に包まれ名を残さなかった』とみなし、それら全てが中国のものであることを知らずに死んだ。」

ヨーロッパの文化遺産がヨーロッパ外の文化によって受容されるということは、ヨーロッパ史の初期にかなりの部分ヨーロッパ外の文化から逆に受容されたものが、ヨーロッパ外の文化へと帰っていくということである。これまでの多くの時代に特徴的であった、与えることと受け取ることの非対称的関係（理念のまず一方向への伝達）は、共通の問題を解決するさいの相互的で対等な協力関係にますます場所を譲りつつある。

私は衝撃ののち、地図の作成をヨーロッパ外の哲学へとつなげることに取り組んだ。もう一つの動機は、私が「インド」の哲学者をたった三人か四人だけ、名前でしか知らないことに気付いたということにある。それは主にブッダとガンジーであり、そしてもう一人はスリ・アウロピンドである。インド人自身が自分たちの最も偉大な哲学者であるとみなしているシャンカラのことはさっぱり知らなかった。私は、彼が北インドのガンジス平野の出身ではなく、南インドのケーララ出身であることも知らなかった。南アジアにもヨーロッパと類似した中心の移動がある。「インド哲学」の初期には全ての重要な人物が北インド出身である。およそ西暦700年から19世紀までは主として南出身である。

注

6 Karl Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, München: Piper, 1949: 19 f.

「世界史の軸があるとすれば、[...] それ以降人間が人間として存在しうるもの、すなわち高度の人間存在が生まれた時点、人間存在の形成において強烈きわまりない生産性が実現された時点であるであろう。[...] その結果あらゆる民族にとって、歴史的自覚という一の共通な枠が生じたものであろう。この世界史の軸は、紀元前500年頃、800年から200年の間に発生した精神的過程にあると思われる。そこに最も深い歴史の切れ目がある。われわれが今日に至るまで、そのような人間として生きてきたところのその人間が発生したのである。この時代が要するに《枢軸時代》と呼ばれるべきものである。

この時代には、驚くべき事件が集中的に起こった。シナでは孔子と老子が生まれ、シナ哲学のあらゆる方向性が発生し、墨子や荘子や列子や、そのほか無数の人びとが思索した、——インドではウパニシャットが発生し、仏陀が生まれ、懷疑論、唯物論、詭弁術や虚無主義に至るまでのあらゆる哲学的可能性が、シナと同様展開されたのである。——イランではゾロアスターが善と悪との闘争という挑戦的な世界像を説いた、パレスチナでは、エリアから、イザヤおよびエレミアをへて、第二イザヤに至る預言者たちが出現した、ギリシャでは、ホメロスや哲学者たち——パルメニデス、ヘラクレイトス、プラトン——更に悲劇詩人たちが、トゥキュディデスおよびアルキメデスが現れた。以上の名前によって輪郭が漠然とながら示されるいっさいが、シナ、インドおよび西洋において、どれもが相互に知り合うことなく、ほぼ同時にこの数世紀間のうちに発生したのである。」（カール・ヤスパース『世界史の起源と目的』、重田英夫訳、理想社、1964年、一部訳文を変更した。）

中国（Zhongguo /China）でも同じである。ヨーロッパでは中心が南東（ヘラス）から北西（フランス、イングランド／スコットランド、ドイツ）へ移動するのに対し、中国では北（北西）から南（南東）へ移動する。枢軸時代⁶（紀元前800年から200年の時代）の中国の哲学者については、中国北部の地図で足りる（図5）。前の千年紀、およそ1100年からの時代は、中国南部と「北の首都」北京を指す矢印で十分である。新儒教の二人の最重要の哲学者である、1130年福建省尤溪（Youxi）県生まれの朱熹（朱子）と、1472年浙江省余姚（Yuyao）県生まれの王陽明以来、有名な中国哲学者は全て長江より南の出身である。

11世紀以来、ヨーロッパではそのような移動についてトランスラティオ・ストゥディイ（学習・知・学識の委譲）という言い回しを用いる。この表現は、ある国から別の国へのトランスラティオ・インペリイ（帝国、支配の委譲）という政治的な言い回しと類似している。このような移動の原因はほとんど解明されていない。単一の原因から全てを説明することはできないだろう。経済的・人口的要因が一定の役割を演じているように見える。顕著なのは空間的關係であり、古い中心と新

しい中心との地理的な接触である。

私はこの講演の最初に、哲学の地理学を研究する解釈学的動機を語った。何かを理解しようと思ったら、それをその文脈の中で見なければならぬ。そこには哲学的認識が獲得された場である地理的な領域もまた属している。地理学自体が明らかに解釈学的な学科である。地理学は、あるものを地図上で示すことによって、それを空間的なコンテキストの中で示すのである（位置づけることは関係づけることだ、というのが地理学上の決まり文句である）。全ての地図がそうするわけではない。いわゆる「島地図」はそれをおこなわない。「島地図」はある領域、ある都市、ある地方、あるいはある国を、大抵は偶然的な境界の内部で示し、その周囲のコンテキストを示さない。これは全く非解釈学的である。川や道は境界ですっぱりと切り落とされるが、その流れは提示された領域の外を指し示している。文化についてこの種の地図は特に不満を感じさせる。境界を越える影響や作用が全く暗示されないからである。内側にあるものは、それ自体から成長しており、それ自体から理解できるかのように見える。しかし、ある領域の文化よりもコンテキストに敏感であるようなものがあるだろうか。

国々や、また大陸全体が長方形の形であることはほとんどない。それらは長方形の地図を決して完全には満たさない。私は空いた場所を体系的に埋めた。その背後の意図は、ある特定の国ないし特定の大陸と、その地理的周辺地域との間の文化的依存関係を明らかにし、可視的にすることである。その一例は、北西アフリカが中世ヨーロッパにとって持つ意味である。もう一つの、むしろより重要な例は、南アジア（「インド」）が中国の哲学と学問にとって持つ意味である。中国はヨー

ロッパ同様、長方形の形をしてはいない。中国の長方形の地図の南西には常に、南アジアという大きな部分のための場所があり、これは通常のヨーロッパ地図で見られる北西アフリカの帯よりもはるかに大きな部分をなしている。このちょうど良い機会に、私はナランダという、インドで最も重要な仏教大学（5世紀から12世紀まで）、それどころか世界で最も重要な仏教大学を中国地図に書き込むことができた（図5）。ナランダは仏教の教説を伝導した三人の最も重要な中国人によって訪問された。5世紀の法顕、7世紀の玄奘と義浄がそれであり、その他多くの伝道者、またチベットの学僧もそこを訪れた。シルクロードは中国の首都西安と洛陽から中央アジアを経てコンスタンティノープルとローマに至るだけでなく、北インドとガンジス平野にも向かったのである。ナランダも地図において中国哲学史に属しているのである。

補遺

ここ山口で私は、中国の哲学が隣国、つまり韓国（Hanguk）、日本、ヴェトナム（Việt Nam）へ拡散したことを示す地図（図6）で終えようと思う。北朝鮮の一部は数世紀にわたって中華帝国に属していたし、ヴェトナムの北部になると千年以上にわたってそうだった。二つの王国は19世紀の終わりまで、毎年朝貢の使節を中国の首都に送った。使節にはしばしば有名な哲学者が加わり、16世紀には、朝鮮史を通じて最も重要な哲学者の一人、新儒教学者の李栗谷（Yi Yulgok）が参加した。儒教という世俗的文化がもっぱら平和的なルートで普及したのは、三つの国のうちで日本の場合だけである。しかし他の二つの国への中国文化の伝播は、二つの国の一部の中国による占領の後の方が、占領中よりも

強かった。私がこのことを指摘するのは、ユルゲン・ハーバーマスが2001年の講演で「世界的な世俗化の力」としての「西洋」について語ったからである⁷。ヨーロッパとアメリカ合衆国という「世界的な世俗化の力」がさまざまな方法によって、さまざまな結果をもたらしながら活動したその数百年前に、中国は東アジアにおいて持続的に世俗化の作用をもたらし、日本ではただ模範および「ソフトパワー」としてのみ作用した。

朝鮮半島（Korea）について私が気付いたことは、ほとんど全ての有名な学者が今日の韓国出身であり、中世の10世紀から14世紀に限って言えば、中央部に位置する当時の首都開城（ソウルの70km北）出身であるということである。朝鮮の学者は自分の国を中国と日

本の架け橋とみなしただけではない。朝鮮内部での発展も存在する。私はこのことを、哲学的に最も重要な首都の間の矢印の楕円形運動として表現しようとした。

ヴェトナムを朝鮮半島と日本の間の海に置いたのは特に意図してではなく、単に場所が空いているためである。この海の名称は周知のように論争の対象である。数年前に日本政府の圧力で、ある世界地図の出版が撤回された。それはこの海が公式の韓国名と日本名との両方で書かれていたからである。私は、この論争を知らずに、この海の韓国側に韓国名の東海を付け、日本側に日本海と付け、両者の間にヴェトナムの地図を挿入して分離した。この全く副次的な逸話をもって私の講演は終わる。

注

7 詳しくは以下の拙稿を参照。»China – eine altsäkulare Zivilisation« in: China ist nicht ganz anders: Vier Essays in global vergleichender Kulturgeschichte, Zürich: Ammann, 2009.

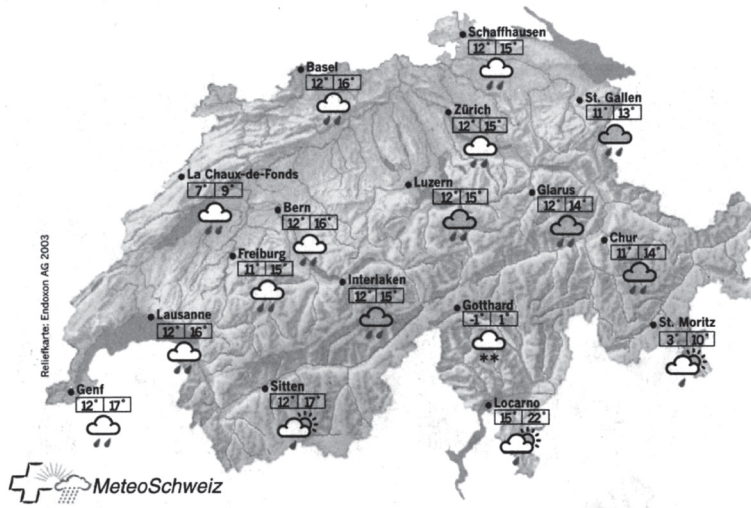


図1 スイスの天気図

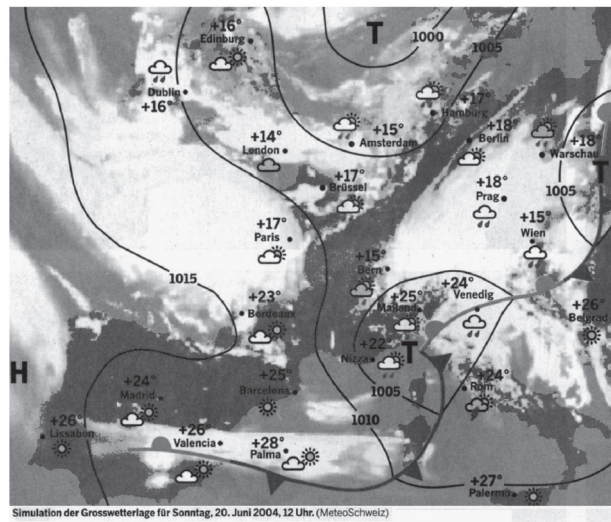


図2 ヨーロッパの衛星写真

A Map of the Medieval Universities and Important Locations of Schools in Europe



図3 ヨーロッパ中世の大学と重要な学校の地図

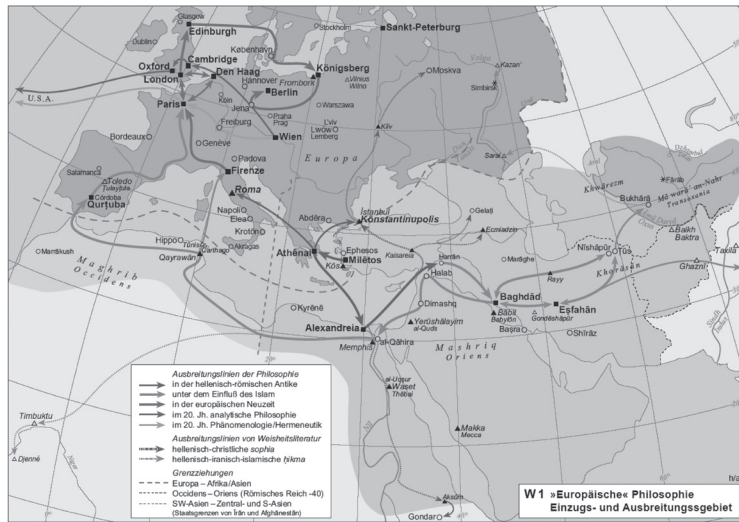


图4 地图W1

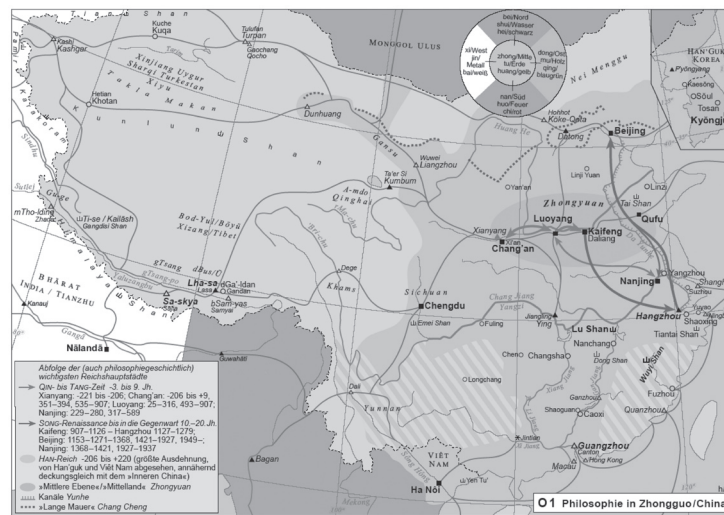


图5 地图O1

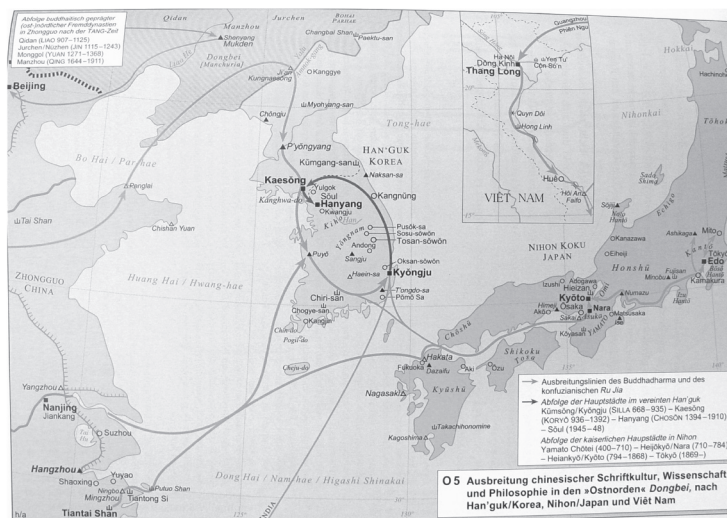


图6 地图O5